

# 農耕の起源に関する一考察

——中四国地域を中心に——

中 村 豊

## はじめに

本稿では、近年の研究動向をふまえ、中四国地域を中心に植物利用から農耕にいたる過程を概観する。その過程で、なるべく縄文後晩期における集落論・社会論に落とし込むよう配慮したい。なお、中四国地域を研究対象とするが、資料を補うために西日本一帯を含めて言及することがある。また、縄文時代を研究対象とするが、その行く末を見定める目的で、弥生時代以降に言及することがある。

## 1. 研究の背景

長らく縄文時代は狩猟採集経済と単純化されてきた。縄文農耕論が流行の兆しをみせることもあったが、いずれも決定的な証拠を明示するにはいたらなかった。

一方で1980年代を前後するころから環境考古学分野が普及していき、植物利用に関する生業研究は進展していった。その結果、発掘調査にフローテーション法が積極的に導入され、出土種実資料はAMS法による放射性炭素年代測定がおこなわれるようになった。さらにレプリカ法の隆盛がこれに拍車をかけた。

先に筆者は、縄文後期から弥生後期にいたるまでの植物利用および農耕の展開を概観した(中村2024)。本稿では縄文時代に的を絞り、中四国地域を中心とする縄文後晩期の植物利用、すなわち低湿地型貯蔵穴による堅果類の利用から、マメ類(ダイズ・アズキ)の生産、さらにはイネ科の穀物(イネ・アワ・キビ)の普及と展開にいたる過程を、より詳細にみていきたい。

## 2. 堅果類と貯蔵穴

西日本一帯において、堅果類の保管場所としてもっとも一般的なのは低湿地型貯蔵穴である<sup>1)</sup>。縄文中期までの類例は多くないが、群集するものが一般化するように、とくに縄文後晩期に増加する傾向が強い。多くは沖積平野に立地するが、河岸段丘上の遺跡においても小河川を利用したものが認められる(図1)。

これら低湿地型貯蔵穴は、縄文後晩期に群集する事例を多く見出すことができる。山口雄治氏(2025)は岡山市津島岡大遺跡における群集する低湿地型貯蔵穴の年代測定を集中的におこない、同時併存は2～4基であると結論づけた。すなわち、低湿地型貯蔵穴の群集は基本的に時間的累積の結果という重要な指摘をおこなった。一方で、たとえ居住域は同一か所にとどまらずに移動を繰り返したとしても、同一の周辺環境を利用した資源利用の継続性・累積性を認めることはできる。す

なわち、西日本における居住域の移動をともなった形の定住という、特異なあり方を見出すことができるのである。西日本における縄文集落は、沖積平野という不安定な地形環境に位置する傾向が強い。低湿地型貯蔵穴と移動する居住域との関係は、不安定な地形環境に適応する定住集落のあり方を示している<sup>2)</sup>。

縄文晩期後葉（沢田式）の高松市林・坊城遺跡における事例（図2）からみて、伝統的な低湿地型貯蔵穴の運用は、イネ科の穀物出現後も健在であることがうかがえる。

なお、岡山県赤磐市前池遺跡、徳島県三好市西州津遺跡（図1）のように、土器型式の幅が比較的短い遺跡においても貯蔵穴は群集する傾向がみられる。この場合は、複数の集落が貯蔵穴を共有する可能性なども想定される。

### 3. マメ類とウルシ

中四国地域におけるマメ類として現時点で最古のものは、縄文中期末の鳥取市桂見遺跡出土アズキ炭化種実である（高田 2024）。次いで、縄文後期中葉の津島岡大遺跡では多量のダイズ・アズキ炭化種実が出土している（那須ほか 2020）。また、縄文晩期中葉の京都市上里遺跡や橿原市／御所市観音寺本馬遺跡などにおいて、まとまった量のダイズ・アズキの資料が認められる。これらの資料を繋ぎ合わせると、縄文中期末から晩期中葉にかけて、マメ類の生産は着実に普及しているとみてよいだろう。

縄文中期末から後期前葉の徳島市矢野遺跡では水銀朱を塗布した土器とともに、水銀朱の付着した石杵がみついている。水銀朱とウルシの利用とは互いに密接に関連しあうと考えられる。マメ類の出土がみられる観音寺本馬遺跡では、水銀朱の付着した石杵や石皿が認められ、上里遺跡にいたっては辰砂原石も出土している。ダイズ・アズキの生産とウルシ利用の活発化には一定の親和性を認めてもよいだろう。

以上のほかにも、人里植物としての鱗茎類（ツルボ）の利用は、縄文前期から弥生時代以降にいたるまで脈々と受け継がれていったものである（中沢 2008、佐々木ほか 2015、米田・佐々木 2020）。またイチイガシを軸とする堅果類利用と低湿地型貯蔵穴のあり方が、マメ類の生産やウルシ利用の活発化とどのように関連し合うのか、これらがそれぞれ集落の展開とどのようにかわるのかを複合的に検討していかねばなるまい。

### 4. イネの出現——南溝手遺跡の再評価——

イネ科の穀物は、縄文晩期後葉、すなわち凸帯文土器の展開するころには、すでに西日本一帯に定着していた。最近明らかとなった鳥根県大田市五丁遺跡の事例（原田 2021）では、縄文晩期前半とみられる土器にイネの圧痕が認められた（濱田 2024 など）。複数事例の追加がのぞまれるが、イネとの接触は縄文晩期前半にまでさかのぼる可能性が高まった。

鳥根県飯南町板屋Ⅲ遺跡では、前池式土器（凸帯文土器出現期）のイネ圧痕がみられた（中沢 2003）。その後同遺跡では、凸帯のない粗製深鉢からもイネ圧痕が見出された（原田 2021）。この土器単体では縄文晩期中葉の谷尻式土器に比定されるが、同様の土器は前池式まで残存する可能性があるため、

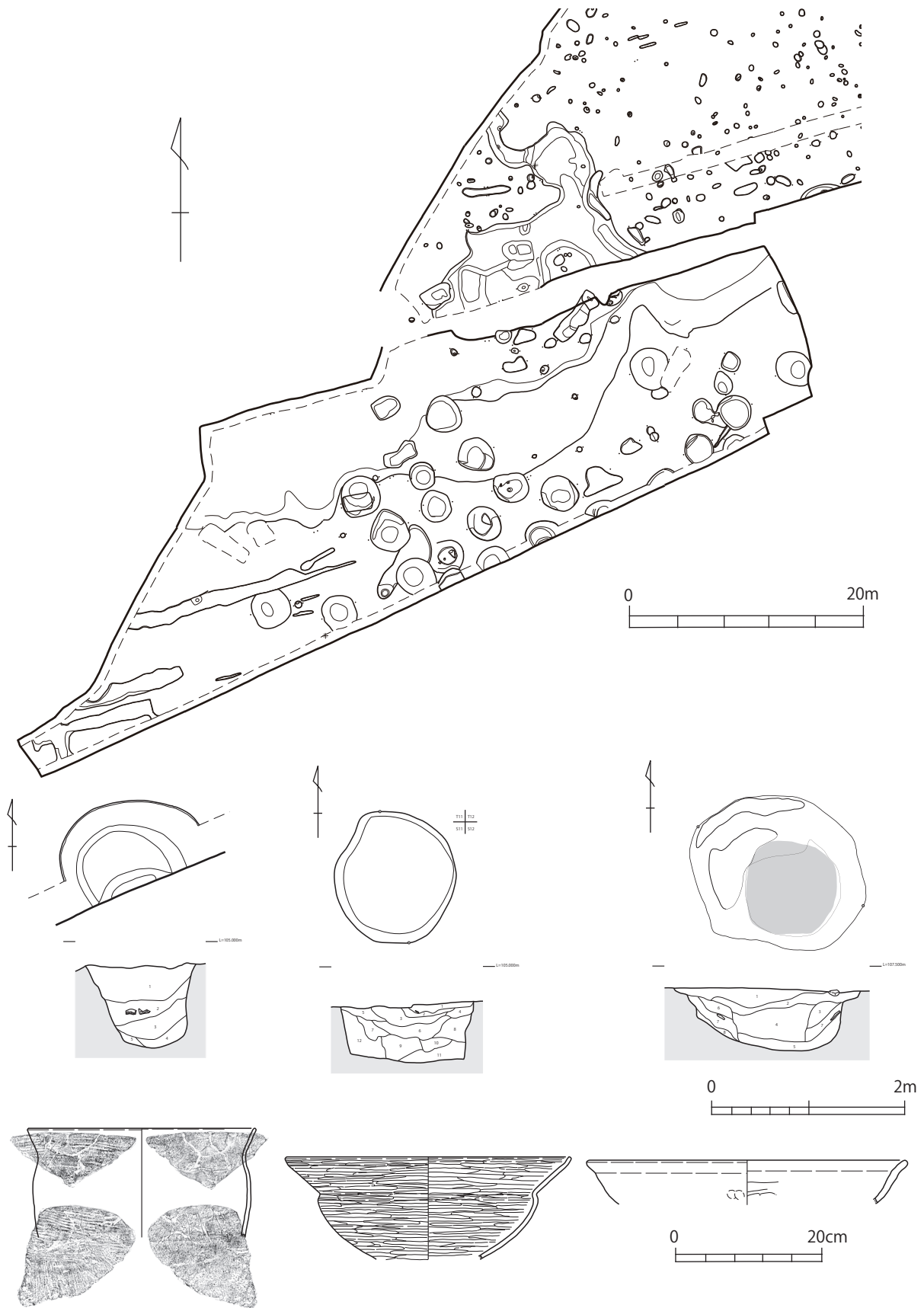


图1 徳島県三好市西州津遺跡低湿地型貯蔵穴

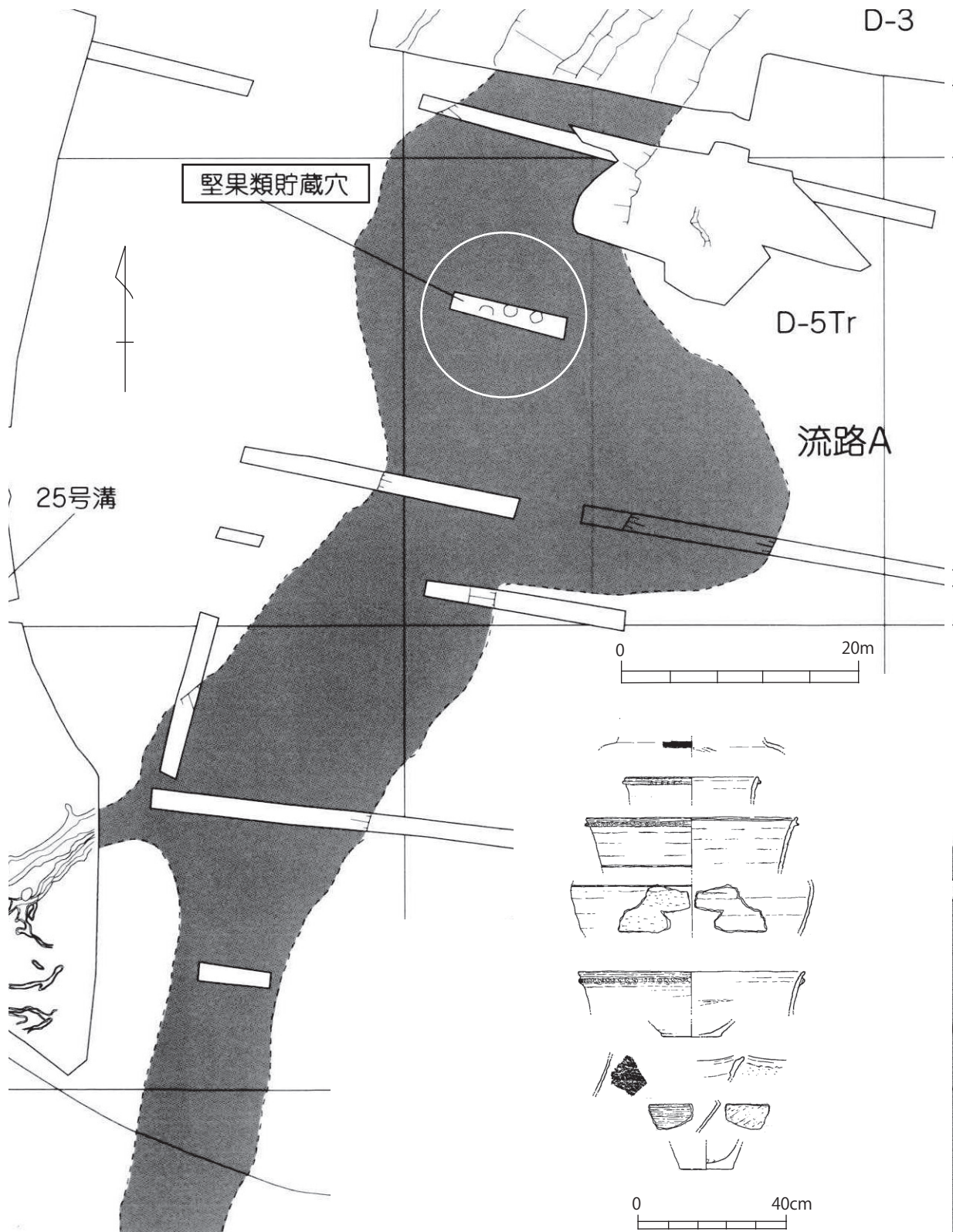


図2 高松市林・坊城遺跡流路A内貯蔵穴と流路A下層下位・最下層出土遺物

前池式土器期のイネ資料が補強されることとなった。前池式土器は縄文晩期後葉のはじめごろ、すなわち凸帯文土器の出現期であり、九州北部地域において灌漑水田が出現する夜臼Ⅰ・Ⅱ式、すなわち「弥生早期」より前である点に留意しておく必要がある。

五丁遺跡や板屋Ⅲ遺跡の動向は、総社市南溝手遺跡出土イネ圧痕資料（図3、平井ほか編1995）の再評価につながりうる。南溝手遺跡出土イネ圧痕土器は、当初福田Ⅲ式土器（縄文後期後葉）期に比定された。出土層位と無文深鉢でありながらミガキ調整によって仕上げがなされている点が根拠と考えられる。その後疑義が呈され、縄文晩期末の「沢田式以降」や「弥生早期」とされた（安藤2006、石川2015ほか）。

当該土器は無文で、実物を熟覧する限りにおいて、胎土、色調、調整、器壁の厚さ、粘土紐の幅、粘土紐の接合痕の傾きが内径接合であることなどあらゆる要素において、縄文後晩期における無文土器の特徴を強く示している（図3上段）。器種は、報告書掲載図（平井ほか編1995）から壺のようにもみえるが、頸部で強く内湾後外反して立ち上がる器形の深鉢か、小さめの底部から内湾して立ち上がる器形<sup>3)</sup>の鉢または深鉢の可能性はある。ここではほかの類例（図4）から後者が有力とみる。粘土紐の接合痕（図3中段C）を水平と仮定して復元すると、報告書掲載図（平井ほか編1995）よりはもうすこし外側に寝かせるように復元可能である（図3上段）。ただし、接合面の磨滅によって内湾が過剰に接着・復元されている可能性もある。

外面の調整はケズリ調整の後、粗めのミガキ仕上げ（図3中段A）で、ヘラ状工具ではなくやや幅広の板や繊維質のようなものを調整具とする。ミガキ調整（図3中段B）といっても精製土器や弥生土器のヘラミガキのような丹念なものではなく、「半精製」といったところである。内面は連続的に接合痕を残したナデ調整である。

この観察からは外面ミガキ調整の前にケズリ調整を施している点が重要である（図3中段A）。発見当初は接合前の小破片で縄文後期後葉と特定され、ケズリ調整の痕跡を見落とした可能性がある（図3中段B）。

縄文後期末から晩期における粗製～半精製深鉢の器面調整は、おおよそ巻貝条痕（縄文後期末から晩期初頭）から二枚貝条痕（縄文晩期前葉から中葉）を経て、ケズリ調整（縄文晩期中葉以降）へと変化する。当該地域における、ケズリ調整後に粗目のミガキ調整ないし丁寧なナデ調整で平滑に仕上げる深鉢または鉢の類例を調べていくと、谷尻式期～前池式期に比較的多くの類例をみいだすことができる。これらはいずれも、小さめの底部から内湾して立ち上がる鉢または深鉢である。倉敷市阿津走出遺跡例（図4-1）、倉敷市広江・浜遺跡例（図4-2）、前池遺跡例（図4-3）、香川県多度津町中又北遺跡例（図4-4）などがある。とくに、中又北遺跡例（図4-4）の調整痕や内面の粘土紐接合痕は、南溝手遺跡例（図3）と共通する。

つぎに層位と出土状況について検討しよう。南溝手遺跡の調査成果で最大の評価点は、谷尻式および沢田式（縄文晩期中葉および縄文晩期後葉）の遺構面の「地山」とされた黄褐色土（シルト層または細砂層）中から福田Ⅲ式の遺物を見出した点にある。沖積平野に立地する遺跡では、1980年台頃まで弥生中期の遺構面で発掘調査を止めることが一般的であった。弥生中期の遺構面下に厚く堆積する黄褐色土から遺物が出土することは少なく、生活適地ではないと判断されたからである。1990年台頃から流れがかわり、「地山」すなわち黄褐色土中から縄文中期末から弥生前期中葉にいたる遺物の出土がみられる点が注意されるようになってきた。南溝手遺跡における福田Ⅲ式の遺物

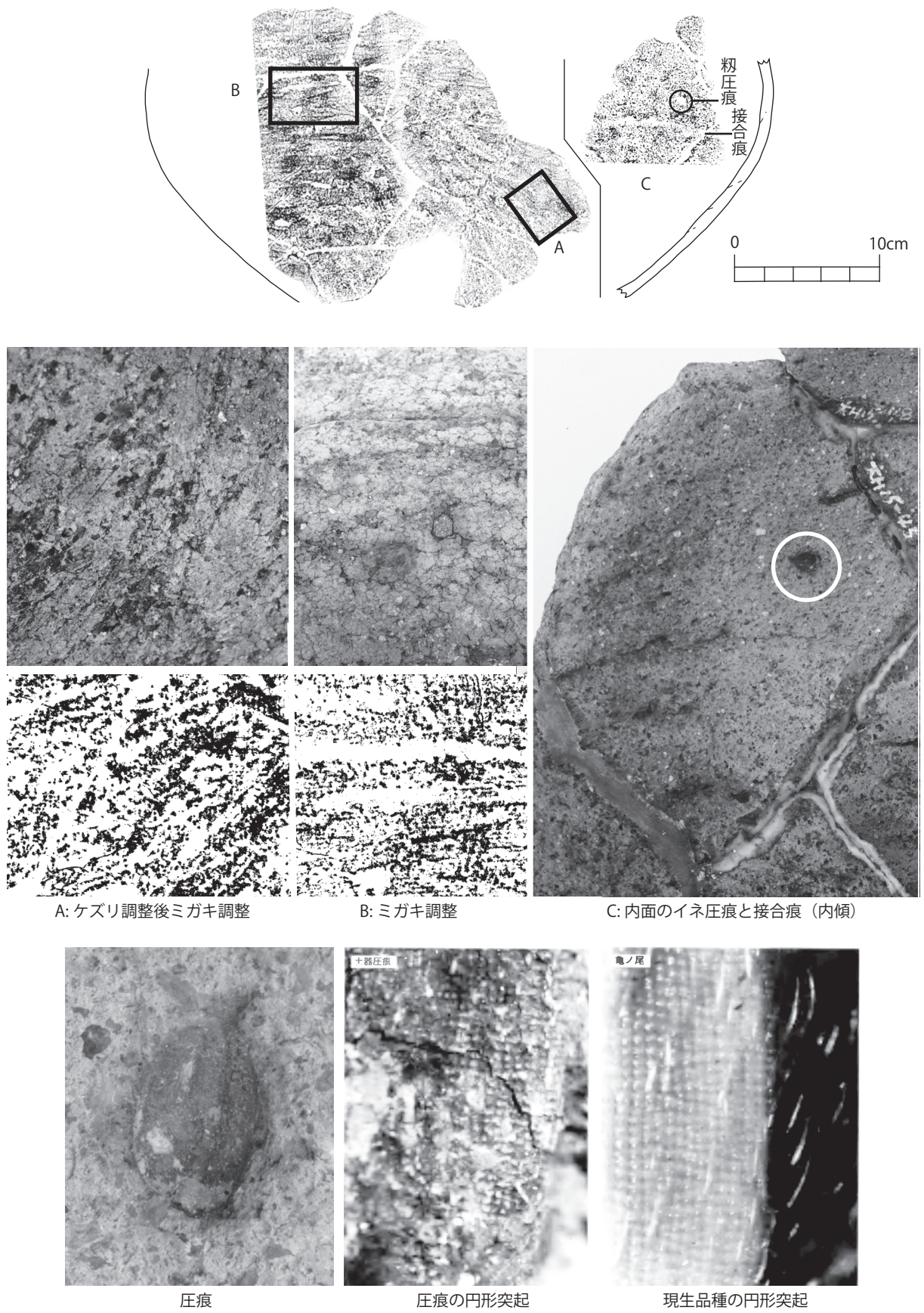


図3 総社市南溝手遺跡イネ圧痕土器

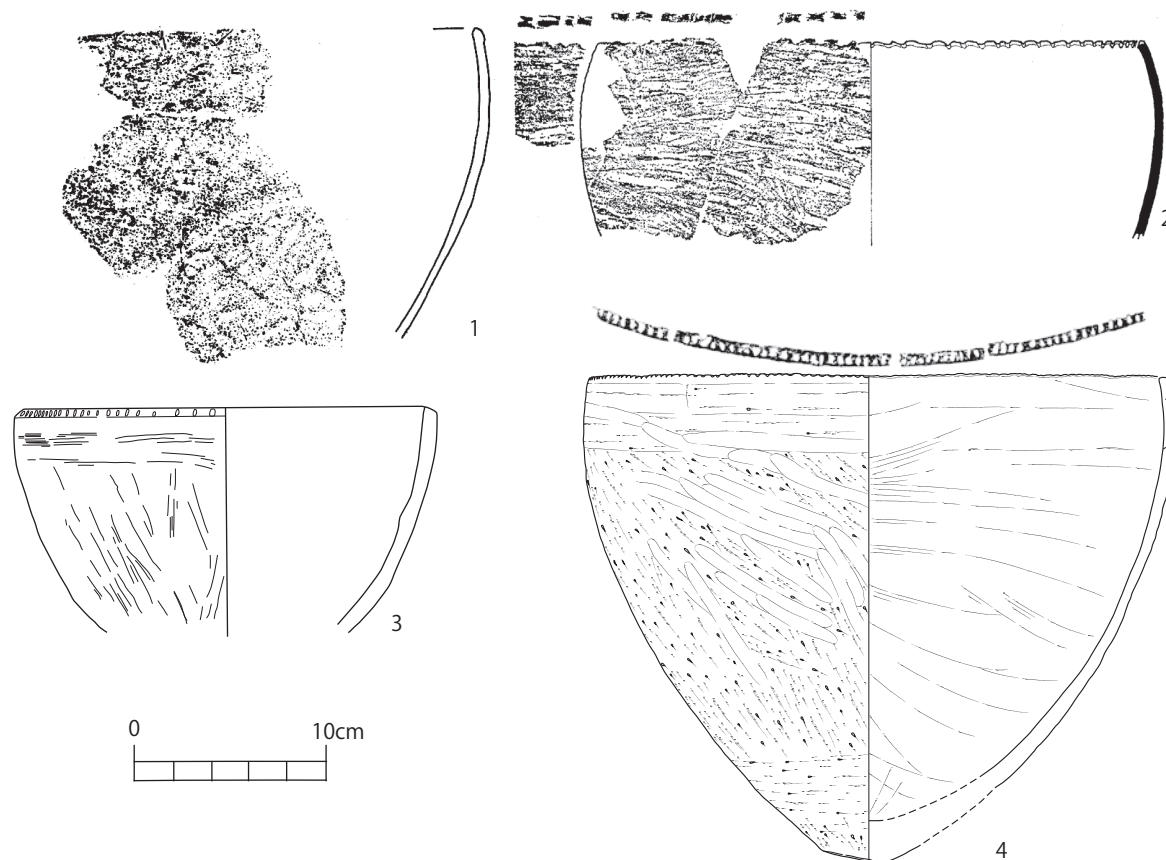


図4 内湾深鉢・鉢

検出も、沖積平野に立地する縄文遺跡への問題意識向上と発掘調査技術進歩の結果である。

沖積平野に立地する遺跡における調査時の特徴として、上層遺構面の新しい遺物群に下層遺構面の古い遺物が混入することは頻繁にみられることがあげられる。同一遺構面が土壌化し、複数時期の遺構・遺物が累積する場合も同様である。一方、一定程度の厚さを持つ自然堆積層を挟んだ下層遺構面の古い遺物群に上層遺構面の新しい遺物が混入することは、まれなケースをのぞいて「遺構の見落とし」か「遺構の掘り残し」の可能性が高い。均質な砂層やシルトの堆積が進行中に、上位の土壌化した遺構面から掘削が入った場合、土色が明確に異なるため混入は確認しやすい。まして小片ではなく、10 cm 四方を超えるような大きさで、1/10 から 1/20 の出土状況の実測図作成が容易におこなわれるような大きさの土器であれば、「見落とし」や「掘り残し」の可能性は低いといえる。すなわち、このケースで重視すべきなのは、イネ圧痕土器（図3）の出土した均質なシルト層または細砂層堆積の下限時期をいかにおさえるかである。

イネ圧痕土器（図3）は、縄文晩期中葉から後葉の遺構面下に深く堆積する黄褐色土中から福田 K Ⅲ式の土器群と同じレベルで検出された。しかし、福田 K Ⅲ式の土器が出土した地点からは少し離れた、河道2へ向かう低位部から出土している。すなわち、福田 K Ⅲ式期にはいまだ当該土器出土地点は形成途上で、福田 K Ⅲ式の土器群と同じレベルまで堆積が進んだ時点で遺棄された可能性がある。上位に谷尻式および沢田式の遺構面がみられることから、この黄褐色土の堆積期間は、福田 K Ⅲ式を上限とし、下限は谷尻式ということになる。先の土器の検討では前池式も候補となるので、イネ圧痕土器の時期としては、谷尻式～前池式<sup>4)</sup>に比定しておくのが妥当と考えられ

表 1 凸帯文出現期のイネ科穀物圧痕

番号	遺跡名	所在地	穀物の種類	時期	文献
1	五丁	島根県大田市	イネ	縄文晩期前葉？	原田 2021、 濱田 2024 他
2	板屋Ⅲ	島根県飯石郡飯南町	イネ	凸帯文土器出現期	中沢・丑野 2003
3	板屋Ⅲ	島根県飯石郡飯南町	イネ	凸帯文土器出現期	原田 2021
4	南溝手	岡山県総社市	イネ	凸帯文土器出現期？	渡部 1995
5	江辻	福岡県糟屋郡粕屋町	アワ	凸帯文土器出現期	中沢 2015
6	石井入口	大分県竹田市	アワ	凸帯文土器出現期	小畑 2015
7	右葛ヶ迫	宮崎県宮崎市	アワ	凸帯文土器出現期	小畑 2015
8	小迫	鹿児島県志布志市	アワ	凸帯文土器出現期	小畑 2015

るのである。

これは、先にみた五丁遺跡、板屋Ⅲ遺跡出土イネ圧痕土器の時期と比較しても矛盾はない。比較的沿岸部に近い五丁遺跡に対し、板屋Ⅲ遺跡は島根県飯南町に位置し、志津見ダム建設に際して発掘された山間部の遺跡である。これに山陽地域の南溝手遺跡例をくわえると、凸帯文土器出現期において、中国地域にある程度のイネの広がりを見出すのは許容される。

凸帯文土器出現期の九州地域において、福岡県粕屋町江辻遺跡（中沢 2015）、竹田市石井入口遺跡、宮崎市右葛ヶ迫遺跡、志布志市小迫遺跡（以上 3 例小畑 2015）で、計 4 例のアワ圧痕をもつ土器が見出されている点もこの仮説を補強するものといえるだろう。以上から筆者は、凸帯文土器出現期には、九州地域から中国地域にかけて、イネ・アワがある程度普及していたと考えるものである。一方で、キビ<sup>5)</sup>の出現が遅れる点と九州地域にアワ、中国地域にイネという地域差（表 1）がイネ科の穀物伝播初期の実態を示すのか否か興味深い、今後の資料蓄積をもって判断すべき課題と考える。

いずれにせよ、西日本において沖積平野に立地する縄文遺跡調査の問題意識と技術の進歩がなければ、当該のイネ圧痕土器自体存在しなかったのであって、その一翼をになった南溝手遺跡調査の評価が揺らぐことはない。遺憾なことに、教唆扇動を駆り立てるかのような批判もあって、渡部忠世氏による堅実なイネ同定（1995、図 3 下段）から発掘調査の精度（平井ほか編 1995）にいたるまで、本来なら肯定的に受け取るべき問題までもが疑問視されることとなった。一方で、今回の筆者による土器の観察と出土状況・出土層位の再検討による限り「沢田式以降」や「弥生早期」という明確な根拠を見出すことはできなかった。また、南溝手遺跡出土資料のもつ意義や、今後を受け継いでいくべき論点についても改めて確認することができた。

## 5. 横刃形石器について

縄文晩期前葉から中葉にかけて、横刃形石器（図 5-1・2）がみられるようになる。徳島県東みよし町稲持遺跡（湯浅 1993、図 5-1・2）に好例があり、徳島県美馬市薬師遺跡や徳島市三谷遺跡など

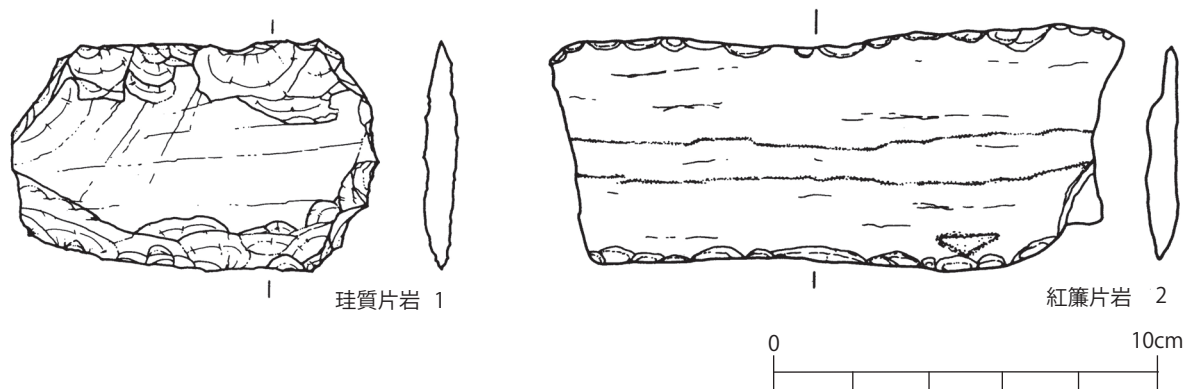


図5 徳島県東みよし町稲持遺跡出土横刃形石器

の類例から縄文晩期末へと継続していき、弥生前期以降は打製石庖丁として弥生後期まで残存していく。

紅簾片岩や珪質片岩製のものが多い。長方形を指向し、横に長い刃部を持っている。それまでみられた不定形刃器はおもにサヌカイト製で、形態もバラツキが多い上に、刃部幅が5 cmを超えることは少ない。両者の間には、石材、形態、刃部の幅など明確な差異があり、一線を画することができる。遠隔地へもたらされることはなく、地域内部での消費にとどまっている。その形態、石材（紅簾片岩）は弥生時代の打製石庖丁に一致し、収穫具としての利用を強く示唆している。肉眼観察ではあるが、サヌカイト製の刃器ではみられない磨滅痕が観察されている（湯浅1993）。一方で使用痕分析や実験考古学的検討は今後の課題として残されている。すでに、九州地域では先行研究（御堂島1997、栗畑2015）がみられるため、比較検討し、機能面を明確にしていかなければならない。

## 6. まとめと課題

以上、中四国地域を中心に、縄文後晩期における植物利用および農耕の展開をみてきた。

堅果類の利用は古くからみられるが、低湿地型貯蔵穴の事例は縄文後期以降顕在化し、同時併存は数基のようだが、群集する事例が多くみられる。すなわち居住域が移動を繰り返したとしても、同一の周辺環境を利用した資源利用の継続性・累積性を認めることはできる。この居住域の移動をともなう形の定住は、沖積平野という不安定な地形環境への適応を示している。

ダイズ・アズキ類の生産は、縄文中期末に嚙矢がみられ、縄文後期中葉から晩期中葉にかけて、定着する過程を追いかけることができる。また、複数の遺跡で水銀朱の精製・流通との共存が認められることから、ウルシ利用の活性化と親和性をもつ。この間縄文中期後葉以前より遺跡数が増加していることからみても、地域社会にとっても重要な生業として普及していったことが推察される。

凸帯文土器出現期にイネ・アワが中四国地域以西に定着していく。現時点ではイネは中国地域、アワが九州地域に偏って分布する。若干遅れるキビの出現時期とあわせて今後の資料蓄積をもって評価すべき課題である。

縄文晩期前葉から中葉にかけて、それまでみられた不定形刃器とは一線を画する横刃形石器がみ

られるようになる。そうして「器種」、利用石材（紅簾片岩）ともに打製石庖丁に受け継がれていく。凸帯文土器出現期、初期のイネ・アワ分布相はすでに内陸部を含む一定の広がりを見せている。炭化種実資料や圧痕資料を補い、伝播普及の過程を探求するうえで、横刃形石器の使用痕分析をおこない、その機能面を特定することは、きわめて重要な位置をしめている。

堅果類（イチイガシ）や人里植物としての鱗茎類（ツルボ）の利用、マメ類（ダイズ・アズキ）の生産、雑穀（アワ・キビ）の生産はいずれも灌漑水田稲作の拡大以降も、重層的に受け継がれていく（中村 2024）。一方で堅果類、マメ類、イネ科の穀物いずれも保管法は大きく変化し、乾燥型貯蔵穴への移行がみられ、集落や地域社会の変化と不可分であると推察される。

以上の諸問題をふまえ、植物利用および農耕の行く末について明らかにしていきたい。

## 註

- 1) イチイガシがもっとも一般的である。
- 2) 河岸段丘など内陸部の比較的安定した地形環境に立地する遺跡にも移動する傾向はみられる。これは沖積平野に位置する集落と有機的に結合し、複合的な社会を形成しているからと推察されるが、さらなる検討が必要である。
- 3) 最大径が口縁部の場合と、内湾度合いが大きく胴部上半が最大径となる場合とがある。
- 4) 谷尻式～前池式は縄文晩期中葉から後葉への移行期、すなわち凸帯文土器出現期ということになる。以下用語としては「凸帯文土器出現期」に統一する。
- 5) 現時点で最古の事例は沢田式である。

## 参考文献

- 安藤広道 2006 「先史時代の種子遺体・土器圧痕の分析をめぐる覚書」『西相模考古』15
- 石川日出志 2015 「弥生時代」『日本発掘！』朝日新聞出版
- 小畑弘己 2015 「植物考古学から見た九州縄文晩期農耕論の課題」『九州縄文晩期の農耕問題を考える』九州縄文研究会
- 柴畑光博 2015 「九州南部における晩期農耕論の課題」『九州縄文晩期の農耕問題を考える』九州縄文研究会
- 蔵本晋司編 2020 『中又北遺跡』香川県埋蔵文化財センター
- 栗林誠治編 2020 『西州津遺跡・佃遺跡』徳島県埋蔵文化財センター調査報告 93
- 幸泉満夫 2024 「イネ圧痕を伴う鳥根県五丁遺跡出土縄文土器片の帰属時期をめぐる一考察」『鳥根考古学会誌』41
- 近藤義郎編 1995 『南方前池遺跡』岡山県山陽町教育委員会
- 佐々木由香・米田恭子・小林和貴・安 在皓・鯉本眞友美 2015 「韓国新石器時代早期と縄文時代前期出土鱗茎の同定」『日本植生史学会第 30 回大会要旨集』44
- 下澤公明・内藤善史編 1988 『本州四国連絡橋陸上ルート建設に伴う発掘調査Ⅱ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 71
- 中沢道彦・丑野 毅 2003 「レプリカ法による山陰地方縄文時代晩期土器の靱状圧痕の観察」『縄文時代』14
- 中沢道彦 2008 「縄文土器付着炭化球根類の検討」『極東先史古代の穀物』3 文部科学省科研費報告書
- 中沢道彦 2015 「長野県域における縄文時代の終末と生業変化」『八ヶ岳山麓における縄文時代の終末と生業変化』明治大学日本先史文化研究所
- 高田健一 2024 「鳥取市桂見遺跡出土の炭化アズキについて」『鳥根考古学会誌』41
- 中村 豊 2024 「四国東南部における縄文時代晩期から弥生時代の農耕」『農耕空間の多様性と弥生農耕の形成』静岡大学登呂農耕文化研究所
- 那須浩郎・山本悦世・岩崎志保・山口雄治・富岡直人・米田 穰 2020 「津島岡大遺跡から出土した植物種子の再検討」『岡山大学埋蔵文化財調査研究センター紀要 2018』
- 信里芳紀・山元素子編 2004 『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 53 中森遺跡 林・坊城遺跡Ⅱ 東山崎・水田遺跡Ⅱ』香川県埋蔵文化財調査センター
- 濱田竜彦 2024 「山陰地方—縄文時代晩期における稲作の試行と大陸・九州との関係—」『季刊考古学』別冊 40
- 原田敏照 2021 「縄文—弥生移行期の種実圧痕からみた農耕の様相—鳥根県を中心に—」『鳥根県古代文化センター研究論集』25

- 平井泰男ほか編 1995『南溝手遺跡Ⅰ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 100  
間壁忠彦・間壁葎子編 1979「広江・浜遺跡」『倉敷考古館研究集報』14  
御堂島正 1997「鹿児島県加治木町干迫遺跡出土石器の使用痕分析」『干迫遺跡Ⅲ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書 22  
山口雄治 2025「C14年代を利用した低湿地型貯蔵穴における同時利用数の推定」『一般社団法人日本考古学協会第91回総会研究発表要旨』  
湯浅利彦 1993「阿波の縄文人―稲持遺跡を素材として―」『鳴門史学』7  
米田恭子・佐々木由香 2020「土器付着炭化鱗茎の同定」『中又北遺跡』香川県教育委員会  
渡部忠世 1995「土器附着の圧痕について」（平井泰男ほか編『南溝手遺跡Ⅰ』）岡山県埋蔵文化財発掘調査報告 100

## 挿図出典

- 図1：栗林編 2020  
図2：信里・山元編 2004  
図3：上段・中段－平井ほか編 1995を元に筆者再実測・撮影、下段－左端は筆者撮影、その他は渡部 1995  
図4：1－下澤・内藤編 1988、2－間壁編 1979、3－近藤編 1995、4－蔵本編 2020  
図5：湯浅 1993

(本学文学部教授)

A Study on the Origins of Agriculture: Focusing on the Chugoku and Shikoku Regions,  
Western Japan

by  
Yutaka Nakamura

This paper has reviewed the transition from plant utilization to agriculture during the Late Jomon period, focusing primarily on the Chugoku and Shikoku regions.

Lowland storage pits for preserving nuts increased from the Late Jomon period onward. Although simultaneous coexistence is rare, even when settlements moved, continuity in resource utilization under similar environmental conditions can be recognized. This indicates adaptation to the unstable terrain of alluvial plains.

Legume production began in the middle of the later Jomon period and became established from the middle of the late Jomon period to the middle of the later Jomon period. Furthermore, its coexistence with vermilion production is recognized at multiple sites, indicating a connection with *Urushi* utilization. The increase in the number of sites during this period compared to the middle Jomon period or earlier suggests it was an important livelihood.

In the last stage Jōmon period, rice and *Setaria italica* westward beyond the Chūgoku and Shikoku regions, Western Japan. Rice was distributed in the Chūgoku region, while *Setaria italica* to Kyūshū region. The appearance of *Panicum miliaceum* was delayed. Further details remain a subject for future research.

From the early to middle Later Jomon period, oblong stone tools distinctly different from the irregularly shaped blades seen previously appeared. These tools were inherited by the stone reaping knives of the Yayoi period. We must conduct usage trace analysis and experimental archaeology to determine their specific functions.

We intend to continue clarifying plant utilization and agriculture.